

## 小さな宇宙を創造する人

芸術家の意味は、その小さな宇宙に生きる人のことであろう。

——柳原義達「私と彫刻」——\*

三重県立美術館には、彫刻家・柳原義達（1910-2004）の作品資料を常時公開する柳原義達記念館がある。生前に作家本人から彫刻 72 点と 600 点以上の素描の寄贈を受けたことを契機として、2003 年に開設した展示空間である。作家没後は遺族から彫刻原型等の寄贈を受け、また近年では柳原芸術の普及に努めるために遺族により設立された基金の助成を受けて、資料の修復と展示公開等の事業を展開してきた。このたび始動した「Y<sup>2</sup> project（ワイワイ プロジェクト）」もこの基金によるもので、次代を担う美術家を紹介し、「いま・ここにある」美術の可能性を押し広げ、三重県はもちろんのこと、国内外に示していくことを目的としている。

第一回として紹介するのは、彫刻家・中谷ミチコ（1981- ）である。中谷は多摩美術大学彫刻学科を卒業後、ドイツで 7 年間学び、帰国後は祖父が暮らしていた家のある三重県津市に移住して活動を続けている。国内外の美術館、ギャラリー等で精力的に作品を発表している彼女だが、一方で、自身の住まう土地に開かれた私設の展示スペースで、年に一度、1 日だけ個展を開催するプロジェクトにも取り組んでいる。

中谷は主に 3 つの手法で作品を制作している。鉛筆や水彩絵具で描かれる即興的なドローイング、粘土や石膏の立体作品、そして石膏と樹脂によるレリーフ作品である。特に 3 つ目の石膏と樹脂を用いた作品は中谷特有の手法で制作される。粘土で塑像を作り、それを石膏で型取りして粘土を掻き出した凹面に樹脂を流し込む。石膏の内側に着彩し透明樹脂を流す場合と、石膏型には着彩せず黒い顔料を混ぜた樹脂を流す場合がある。また、これまで作品の形状は四角く縁取られた絵画を連想させるものが主流であったが、2018 年頃からはモチーフのかたちに沿って切り抜かれたような作品も発表している。そこには技術的な進歩が見られるとともに、作家の制作に対する心理的な変化も垣間見える。

初期の作品には、どこか脆（もろ）さや儂（はかな）さが漂っていた。部分的に着色されたモチーフは、樹脂の層によって内部に閉じ込められて手で直に触れることはできない。すぐ目の前にあるのにとても遠い存在で、あたかも固い樹脂に守られているかのようだ。一方、黒い樹脂を流した作品は、底までの深さによって色の濃淡が変化する。窪みが深ければ深いほど黒色は濃くなり、見る者の意識もまた深く沈潜していく。底の真っ暗な沼に落ちたらもう生きて戻れない、というようなどこか恐怖にも似た感情すら抱かせる、緊張感のある作品群である。それらが一変して、昨年あたりから表面に明るさが戻ってきた。初期の脆さや儂さは消え、切り抜かれたかたちによってモチーフが浮かび上がり、存在感を増して自ら主張してくるようになった。四角い作品は内と外を行き来する窓のような存在であったのに対し、近作ではモチーフが前に出て自ら歩み始めるようになったかのようだ。

柳原義達もまた、時期ごとに異なるシリーズの作品を制作する作家であった。彼は終戦翌年に、火災によりそれまでの作品の大半を失った。そして1950年に、普仏戦争後のパリで流行したドイツに対する抵抗をうたったシャンソンにちなんで、「犬の唄」と名付けた裸婦立像を発表する。敗戦後の喪失感に加え、自身の過去の作品を失い途方に暮れるも、そこから再スタートを切らざるをえなかった彫刻家の中に「飼いならされるな」というレジスタンス精神が芽生えたのだ。「犬の唄」は以後何点も制作されることとなる。しかし、抵抗とは自らを取り巻くものに反発して自己を主張するという、孤独な闘いでもある。その孤独感への不安から柳原は、自らの歩む道を示す道しるべとして「道標」と題した鴉（からす）や鳩をモチーフとした作品を制作するようになり、以降、「犬の唄」と「道標」は表裏一体の存在として作り続けられた。

中谷もまた、初期から近作まで、制作を続ける中で様々な悩みや葛藤を抱えてきたことだろう。《空が動く》の中の、無数のカラスの群れに顔をうずめて体を隠した少女に、中谷自身の姿を重ねることも可能だろう。その手前には、柳原が自身の道しるべとして制作し続けた鴉の彫刻群が置かれる。カラスの群れに導かれ、模索を続けながらも次のステップへと踏み出そうとする力強さが空間全体に満ちる。一方、《犬の唄》をはじめとする新作を中心にした空間では、静かに歌う柳原の《犬の唄》と呼応して個々の作品が語り出し、そのささやきが空間にこだまする。

もがきながら生み出された作品のひとつひとつが、中谷ミチコが歩んできたあかしとしていま私たちの目の前に提示されている。その小さな宇宙は私たちを柔らかく包み、どこまでも広がっていくだろう。

\*柳原義達『孤独なる彫刻』 1985年 p.193

(原 舞子 三重県立美術館学芸員)

In Their Own Little Cosmos

“The meaning of an artist is a person who lives in their own little cosmos.”

—*Watashi to Chōkoku* (I and Sculpture), Yanagihara Yoshitatsu—\*

At Mie Prefectural Art Museum, the sculptures and materials of the sculptor Yanagihara Yoshitatsu (1910-2004) are on permanent display in the Yanagihara Yoshitatsu Memorial Galleries, which opened in 2003. This year, with the support of the surviving Yoshitatsu family, the *Y<sup>2</sup> Project* will be initiated in order to introduce artists who will lead the next generation,

and the project will begin with a solo exhibition by sculptor Nakatani Michiko (1981-).

After graduating from the Department of Sculpture at Tama Art University, Nakatani studied for seven years in Germany, and after returning to Japan she moved to the house where her grandfather lived in Mie Prefecture. Nakatani primarily creates work using three methods: drawings in pencil and watercolor, sculptural works in clay and plaster, and reliefs in plaster and resin. In particular, sculptures created using plaster and resin are characteristic of her approach. The process involves first creating a sculpted form in clay, which is then cast in plaster before the clay is scraped out and resin poured in its place. In some cases, color applied to the plaster adheres to the transparent resin, while in others a black color is added directly to the resin beforehand. Until recently, Nakatani created works with a square outer frame, but from around 2018 she has also presented works in which the sculpture is hollowed out while following the outline of the motif. This demonstrates an advance in artistic technique, but the changes in color and form also reflect psychological changes in the artist. For this exhibition, Nakatani's work will be shown alongside Yanagihara Yoshitatsu's *Song of the Dog* and *Milestone* series, which were his lifelong themes. The figures of women and crows created by Yanagihara will resonate with the work of Nakatani, leading to the generation of a new space. Created while shouldering and struggling through various troubles and conflicts, each of Nakatani's works stands before us as a testimony to the path she has walked in life. Their little cosmos softly envelops us, spreading as far as the eye can see.

\* Yanagihara Yoshitatsu, *Kodokunaru Chōkoku* (Loneliness of Sculpture), 1985, p.193

(Hara Maiko, Mie Prefectural Art Museum)